

Lesekreis (レーゼクライス)とは

ドイツ語で直接的には読書グループという意味であるが、Kreis(輪)の本来の意味に即して、「教える－教えられる」という形を越えて、真に自主的に学習する塾生たちとの輪の中から、共に学ぶものとして、真摯なる**反省的精神**に支えられた学習方途を見出し、不正を憎み、真に平和で差別のない民主的な社会創造の核としての発展を願い、名付けたものである。

◎私たちの目指すもの◎(2012年1月)

卒塾生たちがよく塾にやってきます。すると、多くの子たちが、塾での仲間たちと今でも仲良く付き合っています。ある子の結婚式の出席者が殆ど卒塾生だったり、東京や関西では「レーゼ会」があつたりします。私たちの目指すものは、単に勉強さえできれば、ということではなく、子供たちが学習や読書や合宿などさまざまな活動を通して、友を想い人の痛みや苦しみの分かる人間へと成長することなのです。「学校の成績さえよければ」という小さな価値観ではなく(いわゆる「成績」は、テスト範囲を隅々まで学習し、失敗を謙虚に反省し、驕らず、誠実に取り組む『原則的学習』を実行すれば、自ずとそれなりの結果は出るものです)、昨年のような未曾有な災害があつたときに、自分のできることを真剣に考えることのできることに価値を置きたいのです。国家や社会の危機があちこちで叫ばれています。そうした状況にあつて、子供たちが主体的に、真に未来の担い手となるための基礎をしっかりと築く一助とならんと願っています。

(ここ数年間の、「塾生募集に当たって」の文章を整理しました。)

◎勉強するということは◎(2011年1月)

日々殺伐とした事件(孤独死・自殺者3万人超え・・・)が報道されます。そうした社会状況の中で子供たちに伝えるべきことは何なのでしょう?特定の人や塾でしか手に入らない「中学や高校の過去問(学校の先生によっては同じような問題を出題することもあります)」演習を繰り返すという「アンフェアな行為」によってでも目先の「点数」を追うことでしょうか。それとも、テスト範囲を隅々まで精一杯学習するという姿勢でしょうか。学習する姿勢は『当の子どもたちがこの先どう生きていくのか』の問題に関わります。「手っ取り早く」「得をする」ことを繰り返すような生き方は、子どもたちの本質的発展の阻害要因となります。学習に限らず、出来ないことを素直に反省する心を持ち、自分の置かれた境遇、その境遇を用意してくれている周囲の人々に感謝し、謙虚にひたむきに努力すれば、必ず夢は叶うものです。『なぜ?』を武器にして、単に覚える学習ではなく考える学習、目先の試験や進学だけを目指す「利己的営為」や自己の楽しみだけを追うのではなく、「かの殺伐さ」をしっかりと見つめ、それらを止揚するための学習、他者の痛みにも敏感で、少しでも世の中をよくしようと行動すること、そうした想いを抱いた時、初めて『本当の勉強』が見えてくるのだと思います。

◎伝えなければならないこと◎(2010年1月)

ずっと、私たちは言い続けてきました。「一生懸命勉強することは、自分だけのためじゃない。自分が勉強し続けられる境遇に感謝し、人類みんなが幸せになるために力を尽くすためだ。」「目の前の学校成績や順位よりももっともっと大切なことがある。」「なぜ？と疑問をもちなさい。」と。現代社会では、政権が変わったからといっても、すべての状況が劇的に変わるはずはありません。そういう意味では、「熱し易く冷め易い」と言われる民族性と、ただ「批判」しておけば、という大資本に支えられたマスコミの横暴が目につきます。しかし、様々な「秘密」が明らかになるなど、明るい兆しも見えています。ところが塾の世界はどうでしょう？「学校成績」に至上の価値を置き、子どもたちを(半ば強制的に)「指導」し、そして「実績」を誇大に強調するところもまだまだ多いのです。未来を背負う子どもたちに本当に伝えなければならないことは、そうした価値観ではありません。テレビやゲームや携帯を我慢し(理想は「捨てる」こと)、何より現状を謙虚に自己反省し、努力を継続する、つまり『苦痛を選択する』のは、「輝かしい自己の未来」のためではなく、世界的な視野を獲得し、真に世界の平和と歴史に貢献するためなのです。

◎30年を振り返って◎(2009年1月)

1979年4月に開塾してから、もうすぐ30年。子供たちを取り巻く状況は、「携帯」や「ゲーム」に代表される、「利潤のみを考える行為」によって、当時より酷くなっているようにも思えます。また、「国民の正当な代表者」とは言えない政府による「自己責任政策」は、『勉強する』価値や意味を忘れさせ、夢や希望を奪っています。国連の「高等教育無償化」勧告も無視し、大学に進学するのに考えられないような負担をかけています。そのような環境の中でも、ただ自らの利益のみを追求するのではない『本当の夢や希望』を持つにはどうすればいいのでしょうか。目先の「学校成績」や「順位」のみに拘泥し、『本当の学力』に結びつかない学習は、やはり本当ではないのです。

◎何のために「勉強」するのか◎(2008年1月)

去年、NHKで明代の「鄭和」の話が放送されました。「鄭和のアフリカ艦隊」に関して、中国の交易船がアフリカ沖で難破したそうです。その乗組員の子孫が(現在)人口七千人余りの島に住んでいるのです。確かに周囲のアフリカ系の人々とは肌の色も顔かたちも違います。そしてその家の娘さんが中国に留学しているのです。遙かな昔の祖先の国に。彼女は今、医学の勉強をしています。「島には医者がないので、病人が出ると大変なことになる。一所懸命に勉強して、村の役に立ちたい。」大学へ行くということはどういうことなのか、その原初的な形を見ることが出来ました。翻って日本、一体何人の子が「自分のため」ではなく「人のため」と願って一所懸命に勉強していることでしょうか。私たちの塾はそういう子たちの集う場でありたいと思っています。学習塾協会主催の「塾の日」式典でチベット出身の音楽家のバイマーヤンジンさんの講演がありました。チベットの現状を話すだけで、それは日本の教育状況への鋭いアンチ・テーゼになります。だからといって恵まれている日本の子供たちを「チベットの」境遇に無理やり入れるという話ではありません。(それは例の「奉仕活動」的発想です。) 恵まれ

ているからこそ考えなければならないことがあります。それは、チベットの状況を「まず知る」ということから始まります。勿論チベットに限りません。世界には少しの教育すら受けられないたくさんの子供たちがいますから。そうした事実いきちんと目を向け、知ることの中から本当に自主的な自立的な「学ぶ意欲」や「学ぶ目的」が分かるはずで、現代の教育状況の中で、そういうことを塾が、もしかしたら塾だからこそ共有しなければならないと思うのです。

◎教育基本法の「改悪」◎(2007年1月)

教育基本法が「改悪」されました。2002年の「歴史的文書」は、まさに歴史的となつてしまいました。今年からは誰が決めたのか分からない「公共の精神」が注入され、「我が国と郷土を愛する」態度も要求されるのです。かの「東条内閣の国務大臣」であり「安保闘争」を引き起こした総理大臣の孫は遂に「憲法改正を問う」などということも言い出しました。忘れてはいけないこと、『本当に大切なこと』は何なのか、それを知ること、正確には知ろうとする学習姿勢を身に付けることにこそ、本来の学習の意味があります。「旧」教育基本法を心の支えとして、それこそが歴史的使命と認識し、頑張らなければと考えています。

◎『理想』の危機◎(2006年1月)

今年から教科書が「新しく」なります。詳しくなつて。何を指すのかが不明確な「教育行政」の犠牲者は、いつも子供たちです。そうした事態は、ぶれることのない『信念』のなさから起こるのです。そして、その結果として、或いはそれを一つの要因として様々な「事件」も起こってくるのです。そうした現実に加担するかのように「塾は点数を上げる所」などという言辭を弄する塾関係者まで現れています。或いは、そうした偏見に騙されている保護者も多いのです。その結果、京都のような事件も起こるのです。「点数や成績」は単なる結果であつて、私たちが(塾としても、そして時代を先に生きた者としても)何より意識的に追求しなければならないものがあるはずで、その『原則』を何より強調しなければならないのです。そして、その原則は、きちんとした学習によってしか認識できないし獲得も出来ないでしょう。『原則』は、先人たちが多くの無念の想いを抱いた犠牲者に誓って既に打ち立てています。その誇るべき『理想』が今日危機に瀕しています。子供たちの『純粋な感動する心』がどこに向かうのか、それは私たち自身の責任でもあるでしょう。

◎人間として一本当の勇氣とは◎(2004年1月)

「二世三世国会議員」による「政府」の行為によって、再び戦争の惨禍が訪れようとしています。そうした時代の中で、日々の繁忙さを感じてはいても、学習することの意味を忘れることはできません。このような時代がなぜ到来し、その中でどう生きていくべきなのかは、学習することによってしか解答は与えられないでしょう。様々な「感覚的判断」(「やりたいから」とか、スポーツなど「好きだから」とか)の虜となり、結果、「戦争」を支持するのではなく、排外的な空気の中にあつても、先人が掲げた理想の途(憲法前文に顕著です)を歩くかどうかは、人間としての『本当の勇氣』の問題でもあるでしょう。それはまた、他者の犠牲の上での「豊かな生活」を拒否する勇氣でもあり、自己を厳しく律する勇氣でもあるでしょう。日々の営みは小さくても、『本当の学習』をしていかなければ、決して真実が見え

るようにはなりません。「成績」や「進学」に囚われるのではなく、それらは結果であり、経過であり、目指すものはそこにはないのです。そのことに気付けば、「権力的存在の正体」や「楽しみだけを追うこと」の無意味さが見えてきます。また、「宣伝」や「嘘」に騙されることも少なくなるでしょう。そうした子どもたちだけが持つ『真摯な瞳』は、きっと私たちの未来を救うものであると信じています。他者の痛みに敏感であることからしか『優しい微笑み』は出てこないのです。そのような子どもたちの存在する場として、まだまだ努力をしなければ、と思っています。

◎「学校5日制」と『教育基本法』◎(2002年1月)

今年度からいわゆる「新課程」が始まります。というよりも、「学校5日制」が始まります。教科内容にしても、決して「ゆとり」とか「考える力」のために削減したのではなく、土曜休日に合わせて（その時間的減少の割合で）減っただけでしょう。一方では、「御三家」に代表される「有名私立」には、土曜休日はありませんし、恐らく教科内容もほとんど削減されないでしょう。

そして、ここが重要な点ですが、文科省自身が、「指導要領の範囲を越えて、進んだ範囲を学習してもよい」という指示を出すのみならず、その「指導書」も作ると言っているのです。さて「真意」はどこにあるのでしょうか？

彼らが考えていることをはっきり書きましょう。大多数の「学校」にしがみついた人たち（それは、「学校成績」を異常に気にし「絶対評価」に変わるというのに！—その順位のみを至上の価値とする人たちです）には、削減された教科内容で十分だということです。（基礎基本さえできれば、後は極端に言えば、「従順な公民」でありさえすればいいのです。ですから、学習よりも「国旗や国歌やそして国家への忠誠」が注入されることになるでしょう。）彼らは、今の「学校」が子供たちの才能を伸ばすものでないことを十分に知っているのです。そして、彼らの子どもたちは、塾に通って「より進んだ内容」を学習するか、そうした学習をする「私立」へ進学することになります。そしてまた、学校間にも「進んだ学校」と「そうでない学校」を「自由化」の名の下に制度として導入してくるでしょう。もちろん、学校教師に対しても、「評価制度」の導入とともに、一種の「選別」が行われるでしょう。いわゆる「現状の社会階層」の固定化の進行です。そもそも「教育」とは一体何なのかを考えてみなければなりません。

少し長くなりますが、『教育基本法』の序文を引用しましょう。

『われらは、さきに、日本国憲法を確定し、民主的で文化的な国家を建設して、世界の平和と人類の福祉に貢献しようとする決意を示した。この理想の実現は、根本において教育の力にまつべきものである。われらは、個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育を普及徹底しなければならない。ここに、日本国憲法に則り、教育の目的を明示して、新しい日本の教育の基本を確立するため、この法律を制定する。』

果たして、この内容を変更する必要があるでしょうか？そして、変更後に来るものが何で

あるのか、容易に分かるでしょう。日本国憲法の「改正」です。何をか？もちろん、第9条の変更です。中には第9条に触れることもなく、「感想を述べる」人々もいるので（この拙文が「歴史的文書」になる可能性もあるので）、第9条も引用しておきましょう。

『①日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。』

私たちは、「現実」の名の下に、様々なものを受け入れてしまいます。そして、日常の忙しさの故か、あるいは意識的にか、目の前の「改革」にどのような背景があり、真のねらいがどこにあり、どのように動いていくのかにまで考えが及びません。「豊かな生活」の豊かさの根源に想いが至りません。こうした「現状」の中で、私たちは、大人の責任として、何をすればいいのか、子供たちにどう接すればいいのかを自問しながら進まざるを得ません。少なくとも、「個別的な利益」を求める「道具的存在」にはならないことを決意しつつ。

以下の拙文は、1994年から2001年においてまとめた（まさに「塾案内」の作成の度にも）のです。基本認識は1994年度と変わっているわけではありませんし、むしろ、若干の自負を込めて言えば、当時「予測していた」ことが着々と実現している想いがしています。

（なお、㊦は、2002年及び2003年に、付け加えたものです。）

◎本当の『新たな理念』を求めて◎ —新教育課程及び「17の提言」批判— (2001年1月)

懸命に教える（この場合、それは子供たちの側だけを意味しない）ことの中にこそ、「生きる力」や「自ら学び考える力」そして、それを土台にした「創造性に富む」力が生まれる（ないし、芽生える）のであって、「生きる力」のために「総合学習」というのは、現状の学びがいかに機能していないかの逆説的表現でしかない。IT教育を標榜することの根底には「科学的認識」の普遍性信仰があるのだろうが、科学的思考は現状分析を不可欠の要因として持つ。つまり、「教育の危機的状況」が事実であるのなら、それを数量的に明確に示し、その状況を「引き起こした」原因が何であるかを特定し、その原因を絶つ形で、「新しい」指針を提示しなければならない。徒に「危機」を煽り、「奉仕活動」等の思いつきの指針を提言しても、更には形式だけの「中高一貫」を追求しても何の「解決」ももたらさない。そこに見るのは、ノスタルジーであり、「別の意図」である。（例えば、少年刑法犯のうち、殺人犯は1998年は1949年の3分の1でしかないし、ここ20年来、その数に大きな変化はない。それでも「少年法」は「改正」された。しかも、昨年12月10日付けの「朝日新聞」によれば、衆議院の憲法調査会が欧州各国の憲法事情を視察した際、行く先々で必ず質問したことが、各国の「徴兵制」であるという。）

「一律主義」を本当に反省するのであるならば、その「一律主義」を押し付け、せっかくの少数の真面目な教師の創意工夫を踏みにじってきたものの正体をこそ白日の下に晒すべきである。そもそも指導する者に創意工夫がなく、子供たちにそれを求めることなど不可能である。つまり、

「文部省」（文部科学省）は廃止すべきである。少なくとも「指導要領」の（持つと言われる）「法的拘束力」を廃止すべきである。ついでに「内申書」も廃止すべきである。その「元凶」を放置したままで、いかなる「改革」を叫んでも、それは「改悪」にこそなれ、決して改善にはならない。矛盾は安定の中から生まれ、その矛盾との抗争の中から、**矛盾を根底的に止揚する形**でしか新たな方途は生まれない。今日、「二世三世国会議員」の多さが「政治不信」の一つの重要な要因に挙げられるように、『正当な競争』は少なくなっている。数々の「改革」は、一部の経済的に恵まれた層の一種の「特権」の固定化をもたらすだろう。そして塾が、その「片棒を担ぐ」ことは、「矛盾」を更に助長し、**停滞と社会階層の格差の固定化に寄与するもの**でしかない。

レーゼクライスを巢立った多くの諸君が、「改悪」に手を貸すのではなく、社会的諸矛盾を解消する地平で活躍することを願うとともに、そのような『**原則を固守する**』場でありたいと思う。

◎病んだシステム◎(1996年12月)

1996年は、「いじめ」の悲惨さに始まり、「沖縄」問題の意識化・「優秀な」官僚・「立派な」政治家の愚行に終わったと言えるだろう。戦後の日本社会を支えてきた**システムそのものが疲弊**している。「教員採用」に殺到する若者達、彼らは、本当に今の教育状況を深く見据えているのだろうか。安定した体制の中からこそ矛盾は生まれる。そして、その矛盾は、根底的な止揚を目指して、動きを止めない。矛盾を先鋭的に感知し、矛盾の止揚に向かった多くの人々を暴力で圧殺し、「**金**」という「**宗教**」によって**統治して来た「つけ**」が、一挙的に露呈し始めている。物言わぬ、黙々と授業に出席する「いい子」は、今度は、国際的な競争の中で、「独創性がない」とか「意欲がない」と批判され、「個性」尊重の教育が声高に叫ばれ、地域の教育力を奪っておきながら、「地域の教育力」が「いじめ」の特効薬としてまことしやかに述べられる。自らの安定のために「ものを言わせぬ」システムを作り上げたにも拘わらず、そうしたシステムの帰結は悲惨なものでしかない。服装を強制し、生活時間を強制し、はなはだしきは、もともと茶色っぽい髪をわざわざ黒く染めさせる、そういう「学校」の中で、いったいどういう「個性」とどういう「独創性」が可能なのか。にもかかわらず、一方で「(学校の)成績を上げます」「～点上げます」「順番がどうの」等々の愚かな宣伝にも躍らされ、多くの「賢明な」親たちは、その成績のみをわが子を見る判断基準とし、子供たちに「お勉強」を強制する。その一方で、「悪い官僚ね」などと、いっばしの批判を展開する。果たして、官僚を批判する資格があるだろうか。政治家を批判する資格があるだろうか。

◇いじめをなくすには◇ 教員希望者が殺到するのは、「人確法」以来である。そのことの意味するものは大きい。「安定」を求める風潮は、その根底でほくそ笑む勢力に支えられてきた。そして、失われたものは余りにも大きい。どんなに人権を強調しても、どんなに生命を強調しても、鋭い子供たちは、その根底にある「本音」を看破し、屈折した抵抗を試みる。しかし、「安定」した者に、『苦しむ者』の本当の苦悩が分かるだろうか。

いじめをなくすことは、意外と簡単である。「文部省」をなくすこと、教育委員任命制を

やめること、そして、「人確法」以前に返すこと（「行革」になる！）である。しかし、より、本質的には、私たち大人が、唯一の価値観とも思えるかの「宗教」を捨てることである。果たして可能だろうか。しかし、不可能であるなら、私たちの、そして子供たちの未来はない。（㊦「人確法」…1974年成立の「学校教育の水準の維持向上のための義務教育諸学校の教員職員の人材確保に関する特別措置法案」。要するに、教員の給与引き上げという優遇措置である。当然のこととして、この後教育現場への「主任制」が導入される。また、時の首相田中角栄は「五つの大切、十の反省」という徳育教育を強調し、そして自らは「ロッキード汚職」にまみれた！）（㊧かの「宗教」…いわゆる「お金こそすべて」という考え方。）

◎より深刻な状況の中で◎（1995年12月）

くしくも、かの12月8日に、例の元文部官僚に有罪判決が出た。しかし、かつて大きく新聞紙面を賑わした事件が、「新指導要領」との関連もなく、小さく報じられただけである。私たちの「忘却病」は、どこまで続くのだろう。「診断テスト」も、一方でその成績に一喜一憂するグループに支えられ、不死鳥のように幅をきかせはじめている。月2回となった「土曜休日」も、やはり、ひたすら「長時間練習」と「精神論」を説き、「いじめ」の一種と化している「部活」にその大半が使われている。ただ、指導者の言うことを、ロボットのようには聴く「部活」は、「いじめ」の発生の大きな要因である。そうした状況の中で、黙々と、努力を続ける多くの子供たちのことを考えるとき、頑張らなくては、と思う。

◎共育の普遍性◎（1995年12月）

阪神大震災に始まった今年は、「オウム」・数々の「不正」と殺伐とした社会状況が続きました。そうした中で、今年もまた痛ましい「いじめ」の問題が続き、かの「文部省」ですら、（自己の責任と、根本的な視点を欠いたままで）「対策」を声高に述べなければならなくなっています。恐らく、世の『こころある』人々が気づいているように、「官」主導のもろもろの問題をそのままにしたままで、子供たちの世界のための「正常化」を望んでも、それは、徒労に終わるに違いありません。「不正」を「不正」のままに見過ごし、そうした社会で、自己のみが「豊かな」生活を追求する、そうした「大人」たちがいる限り、子供たちの痛ましい状況には何の変化もなく、ひいては、そうした社会の再生産の「歯車」として、利用されていくことにもなるでしょう。

私が最近強く思うのは、塾に対する、「学校成績」のみを「上げること」、その「道具」として塾を利用しようとする一部の「親」の功利的な要求の強さです。『なぜ勉強するのか』の視点を欠いた、「とにかく勉強しろ」という圧力です。私は、問いたい。なぜ、それほどまでに子供たちに「圧力」を加えるのかと。そのことが、「学校」における「いじめ」に結び付く遠因の一つになることになぜ気づかないのかと。

もし、「大人」たちが、一切の不正を許さず、「長いものにまかれ」ず、『なぜ？』を真摯に求め、（そうすると、子どもの「お勉強」などに関わる時間もないでしょうが）、**本当の『人間としての在り方』**を求めているなら、「いじめ」にとどまらず、殆ど一切の「差別」も、恐らく姿を消すことでしょう。そして、そうした時こそ、子供たちが、本当の意味で、

自主的かつ創造的に学習することが可能になるでしょうし、殺伐とした社会を変革し、本当の意味で『豊かな未来』を構築する一員になることでしょう。そして、それこそが、本来『教育』に課せられた**普遍的義務**だろうと思います。

◎原則的な場として◎(1994年12月)

「いじめ」事件が騒がれています。しかし、私は、そうした騒ぎを「冷めた」眼で見ざるを得ません。かの「体罰」問題、そして昨年の「業者テスト」問題等、このままでは、私たちは、「忘却の民」として歴史に刻印されざるを得ないでしょう。「このままでいいのか」『断じて否!』そういう声を、私たちは、自らに対する反省とともに**人間として**あげ続けなければならないように思います。塾を開設してから早16年、この間の出来事については、**レーゼクライスの歴史**に簡単にまとめています。それは、私たちの「現実」との戦いの歴史でもあるし、私たちの『学び』の歴史でもあります。試行錯誤を繰り返し、「現実」に対して挑んだ（そして、挑んでいる）記録なのです。『意志』と程遠いところでの展開を余儀なくされたり、認識に変化・深化はあれ、私たちは、絶えず『本当のもの』を求めて来たり、それは、今後も続くでしょう。それは、「現代社会」の構造を無批判的に受け入れることを拒否して来た人間の当然とすべき方途であろうと思います。以下に述べる**教育状況**は、若干の書物をもとに、『実践』を踏まえて位置付けたものです。「教育」とは名ばかりの「学校教育」が依然として存在し、その諸矛盾が（その構造からして半ば必然的に）次々と露呈し、表面的な「改革」が叫ばれる現代、その歴史的背景をさぐり、様々な「改革」の真意を看破しておくことは、今後の目指すべき方向、就中、今後の事態を予測する上でも必要であろうと思われるからです。「いじめ」も「体罰」もその根本にある制度としての「力の論理」を見抜かない限り、いかなる「対策」も忘却への装飾にしかならないでしょう。それは、単に子供達の問題なのではなく、まさに我々大人たちの問題に外なりません。『**在り方**』こそが**問われている**のだと、声を大にして叫ばなければならないのです。

◎教育状況について◎(1994年12月)

共に学ぶという意図を持って一つの運動体としてレーゼクライスを開始するに当たっては、次のような歴史・現状認識がある。

現代の塾が、「学校」との関係の切って成立し得ないことは言うまでもない。しかし、「学校」を絶対視し、それこそが全てであるような姿勢は、過去の過ちを再び繰り返すこととなる危険性を十分に孕んでいるように思われる。

そもそも「学校」は、1872年の学制の公布により成立し、近代日本の発展とともに制度として発展してきた。しかし、現在までの120年間のうち、70年間以上は、日清・日露に始まり、「大東亜共栄圏」をととなえ、戦争遂行するという国家主義・軍国主義の注入の場であり、「愛国青少年」育成の場であった。そうした歴史と反省の上に出発した『戦後教育』は、**教育基本法**に顕著なように、**個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期するとともに、普遍的にしてしかも個性ゆたかな文化の創造をめざす教育**であるはずであった。

しかし、日本は、大東亜戦争を遂行したA級戦犯容疑者を戦後11年で総理大臣にするほどの国である。(㊦ A級戦犯容疑者…いわゆる「60年安保問題」を引き起こした岸信介) (それは、戦前の体制を全否定し、指導者を入れ替え、今日に至るまで、戦争犯罪の追求をやめないドイツと大きな対照をなしている。) かくして戦前から温存され、継続した「教育観」と官僚組織 (更には「教育学者」) が、何の戦争責任を問われる事なく、『理想』を骨抜きにし、国家意志の物理的遂行者として子供達を「飼育」していく政策をとっていくことは必然である。朝鮮戦争、経済の高度成長という状況の中で、ひたすら、経済効率を求める国家による「期待される人間像」が、何であったか。「正しい愛国心」を強調し、「象徴に敬愛の念を持つこと」それが「日本国の独自な姿」とされるに及んだのである。 **杉本判決**を無視した現在の教育行政が、そうした戦後の歴史の延長上で、どのようになされてきたか、ある程度真面目な「教育者」なら、十分知っているだろう。(㊧ 杉本判決…いわゆる「家永教科書裁判」(第二次訴訟：検定不合格処分取り消し訴訟)において、国民の教育権、教育の自主性、行政の不当介入を明確に認めたもの。今日では考えられない内容である。なお、この裁判長がその後どのような軌跡をたどったのかは、言うまでもない。㊨ 2002年11月、家永三郎氏が逝去されました。謹んでご冥福を祈りたいと思います。)

93年度から中学で実施された「新指導要領」は、「能力主義」をうたい、「多様化」を旗印にする。それは、一見ソフトに、人々の心を包めるかもしれない。しかし、そこで言われる「能力」とは何で、多様性とは何なのか。「多様な個別的な能力」の名のもとに、子供達の日常まで管理し、「内申書の上げ方」なる書物の跋扈を許すものでしかない。「ボランティア」を点数化し、「生徒会活動」を点数化し、「部活動」を点数化する、そして、いみじくも、ここ香川県で、全国に先駆けて実施され、全国的に散々の非難を浴び、中止に追い込まれた「観点別学習状況診断テスト」に明らかのように、「テスト」で判断、いや「評価」される「創造性」なのであり、「経済効率」という価値観の下に一元化される「多様性」に外ならないのである。

かつて「侵略のため」という名の戦争が人類史上にあったらうか。戦争は、常に、「平和」と「幸福」の名の下に行なわれ、そうした政策・国家意志に柔順に従うことが「愛国心」であるとされてきた。現代の、あらゆる分野における点数化・序列化の中で、大学入試をそのままにした上で行なわれる「新教育」に、同時的に強調される「愛国心」が何を意味するかは、もう明らかだろう。そして、この「新教育」を主導した文部官僚(選挙に出て落選した収賄官僚!)を決して忘れまい。今は亡き田中角栄が何を唱えたか、決して忘れまい。そのような「力の論理」の末端たる「学校」に未来はあるか。断じて否である。その中で、青春期をむかえつつある子供達は、人間本来の知的欲求を忘れ、学問の本質から目をそらし、あるいは目を覆い、その中で自分のみが勝利せんと、せっせと塾に通い、あるいは刹那的な行動に身をまかせ、あるいは当然のごとく登校を拒否している。

こうした状況の中で、当初は、その根底的な非人間的制度を温存したままで、スパルタ的な解決法までが(「愛のムチ」として)許容されていた。(昨今の新聞紙上でもまだ見られる)しかし、「共通一次」導入以後の没個性化、多くの登校拒否や高校中退者の増加の中、

そして何より、「経済大国」としての地位を維持したい産業界の意向を強く汲んだ文部省は、むしろ、このような状況を利用し、「個に応じた教育」の甘言を弄し、実は3%の、国家意志遂行のエリート養成のため、「学校」外の機関への「通学」を認めるという形で、不満をそらしつつ、「飛び級」や、公立の中高一貫校の構想も打ち出している。校則の緩和や「内申書」の公開、更には「教育の自由化」など、現代の諸矛盾を一見解消するような方策も俎上に上っている。しかし、**その根底に流れる意志と目標**を見誤ってはいけないであろう。「教科書検定制度」をくずさず、「教育委員」任命制をくずさず行なわれる「改革」であることを忘れてはいけない。「日の丸」をあげ、「君が代」を強制する改革であることを忘れてはいけない。

私たちの力は小さい。ただ、『塾』であるからこそ、できること（もしかしたら、塾という存在形式でしか行なえないこと）を、私たちは追求する。かの『松下村塾』のように、「学校」以前に『塾』は存在していたのである。来るべき困難の時代に真の普遍性と創造性を持った人間の育成を期すことこそが、すべての現代人に求められている。そしてそれは、「学校追随」するのではなく、時代特性を十分に考慮に入れ、絶えず、『教育基本法』の理念に帰ることを意識的に追求することによってしかなし得ないであろう。確かに、『理想こそが現実をきり拓く』のだと思う。

新たな止揚形態は、現実の矛盾の中からは生まれえない。財界や文部省からの上位下達の「学校構造」、あまりに絶対的に見える中から、新たな萌芽が生まれ出ることを私たちは信じている。でなければ、日本国憲法前文の中でいみじくも言われるように、「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こる」ことは、避けられないであろう。

「強制力」を持つ「新指導要領」でうたわれる国際化とは、単に、英語が話せることではない。英語で挨拶し、道案内をすることではない。「豊かな」生活の豊かさの根源に想いを致すことであり、飢えに苦しむ人間を想うことである。そして、それは、戦争の真実を覆い隠し、戦争責任を忘却の彼方へ葬り去ることではない。まして、「愛国心」を強調しながら、莫大な、闇の利益を得ている「政治屋」を許すことでも決してない。**全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有する**視点から、歴史の教訓を忘れず行動することである。本当の『教育』は、そのような国際人の育成にあることは、普遍の真理であろう。たとえ、それが一粒の麦であっても、大きく実る可能性を秘めている。

『塾』の存在意義も、そこにある。1970年代以降の爆発的な「乱塾」の中で、多くの批判を受けつつ現に存在する塾、それは、一面で教育の場としての、「学校」の**相対化**を端的に表している。そして今、誇大広告と営利と、ただこの「現代社会」の再生産の意味しか持たない「塾」の淘汰も始まろうとしている。そうした中で、真に原則を追求する非権力の塾のうちにこそ、本当の教育改革の萌芽がある。今、単に学校を批判するのではなく、**学校をも包摂した形での止揚形態**を射程に入れつつ力を尽くす時であろうと思う。

参考文献 『教育基本法はどこへ』(堀尾輝久)・『日本教育小史』(山住正巳)・『教育の戦争責任』(長浜功)・『体罰』(NHK取材班)・『「戦略」としての教育』(宮川俊彦) その他